

## 小さな行動で世界を変えたい

岐阜市立加納中学校 3年

田中 梨愛（たなか りな）

612万t。この数値は何を表していると思いますか。これは、1年間で日本で捨てられた食材の重さを農林水産省及び環境省が平成28年度に推計したデータです。612万tは、陸上で最大とも言われているアフリカゾウ約90万頭にもなります。そう言っても数が大きすぎて実際の所は、想像することもできません。

私は中学1年生の夏にアメリカに一月間ホームステイをしました。日本とは違う雰囲気、文化、物の大きさ、価値観、様々な違いに戸惑う中、一番驚いたのは食文化の違いです。私がホームステイをした家は、近くにスーパーがなかったこともありますが、一度の買い物では、車の荷台に載せられるだけ何カゴもの食材を購入していました。大量の食材が詰まった冷蔵庫から、その日の食事が準備されていましたが、一度の食事でも家族だけでは食べきれないくらいの量が食卓に並びました。もちろん、一度の食事では食べきることはできません。小さな子どもたちは、自分の前に置かれた食事を当たり前のように残していました。子どもが食べきれないものを大人が食べるという我が家でよく見られる光景は、一度も目にすることはありませんでした。また、たくさん食べ残してしまった食事を冷蔵庫に保管して翌日に食べるということもありませんでした。当たり前のように捨てられていく食事を見るたびに、「もったいないなあ」と思いながら何も言えずに過ごしていました。

日本に帰り、食品ロスについて調べてみました。外国だけのことだと思っていた食品ロスの問題は、日本でも大きな問題となっていることを初めて知りました。多くの食材を外国からの輸入で補っている日本は、アメリカと同じくらい食品を廃棄していることを知り、衝撃を受けました。調べてみると、食の安全という考え方から消費・賞味期限の設定に違いがあり、すべての国を同じように比較することはできないということも知りました。でも、少し自分の口に合わないから捨ててしまう。食べきれないから捨ててしまう。多く作りすぎ売れ残った食品が廃棄されていくニュースもよく見かけるようになりました。そんな状況を目にした時、小さな時に読んだ一冊の本を思い出しました。「食べ物には作ってくれた人の思い、食材を育ててくれた人の思いが詰まっている。捨てるということは、その人達の思いや命を捨てることになる。命をいただく私たちは、感謝をしていただかなければいけない。」というものです。

私の家では家族で食事をする時、自分の食べきれる量しかお皿にとりません。多めに作った食事は、冷蔵庫で保管して翌日に食べたり、違う料理に姿を変えたりして食卓に並びます。家族みんなが当たり前のように「もったいない」ということを心において生活しています。必要なものを必要なだけ購入することや計画的に使うこと、そして、感謝の気持ちをもって生活したら食品ロスは少なくなっていくと思います。

私たちの学校では、給食部員を中心として、全校で完食を目指したり、給食調理員さんたちに感謝を伝えたりする活動しています。今は、コロナ禍のため、仲間と楽しくお話をしながら給食時間を楽しむということはできませんが、少しでもみんなが食に関心を持てるようにと、お昼の放送を工夫してくれています。給食という場でも、全国の小中学校で食品ロスを意識した取り組みがなされると、1日に廃棄されていく食品の量も大きく変わっていくと思います。

どんなに時代が変わり、豊かな生活が送れるようになっても、私たちが生きていくうえで、欠かせないものは食です。世界には9人に1人の人が飢餓に苦しんでいます。物があふれた日本で生活している私には、食に苦しむ気持ちはなかなか考えることはできません。でも、私はこの「もったいない」という考え方と「命」をいただくという思いを、これから出会う世界の人に伝えていきたいと思います。私の将来の夢は、学校の先生になることです。「ほんの小さなことでも、一人ひとりが考えて行動にうつせば、きっと世界は変えられる」ということを伝え、一緒に取り組んでいきたいと思っています。みんなが笑顔で生活できる、そんな世の中を目指して。